

## 自己防衛の英語・10のルール

三浦 孝

静岡大学教育学部助教授

### 無防備な英語力の落とし穴

かつて日本人の海外旅行といえば、添乗員に引率された団体パック旅行が圧倒的であった。しかし今日では海外語学留学やホームステイ、ワーキングホリデイなど、日本人が個人で海外滞在を楽しむことが普通となってきた。海外滞在をよりよく楽しむには、言語の使用が欠かせない。理想的に言えば、ローマに行くならイタリア語、エジプトに行くならアラビア語というふうに、訪れる国の第一言語を学習して行くことが望ましい。しかし、そこまで余裕が無いといった場合には、やはり世界で広範囲に通用している英語を使うことになる。

「英語力があれば海外を自由に歩き回り、友達を作れる」という発想はある程度当たっているが、問題はその「英語力」の中身である。自分の英語力で、緊急事態に対処し犯罪や迷惑行為から自己を防衛できるかが問題なのである。当たり前の話だが、世の中のすべての人が善人であるわけではない。どの国にも、犯罪者や悪質な人間は必ずいるし、对人的な行き違いもある。ところがほとんどの英語教材には善人ばかりが登場し、いたってものわかりのよい会話に終始している。もともと安全ボケの日本人が、こうした教材で無防備な英語力を身につけ、外国に出て行って easy target (いいカモ) にされる事件はたびたび発生している。筆者が記憶している事件の中から数例を挙げてみよう：

1. 日本人女性4人グループ、イタリアで次々とレイプされる。現地で知り合った男性に「スパゲッティをごちそうする」と誘われ、アパートを訪れたあげく。
2. 日本人女子大学院生、台湾で絞殺される。たまたま乗ったタクシーの運転手の「自宅に

泊めてあげる」の誘いに乗ったあげく。

3. 日本人女子高校生、長期留学先のアメリカでクラスメートに殺される。「今日親から生活費が送金されてきた」と話したため金欲しさの凶行。
4. 日本人女性、オーストラリアにダイビング留学到着数日後に行方不明。一ヶ月後に死体で発見。犯人は現地の少年と判明。「宿まで送ってあげると車に乗せ、人気の無い場所に連れて行ってレイプしようとしたら抵抗されたため絞殺した」と供述。

皮肉なことに上記の人達は、なまじっか言葉が通じたために被害に会ってしまったのである。無防備な語学力の落とし穴がここにある。そこでこの特集では、自分の英語力で海外に乗り出そうとしている人のために、よく遭遇しそうな問題場面を取り上げて、自己防衛と問題解決のための英語表現を紹介する。

"Do you have small change?" はたかり

### の表現

"Do you have small change?" (「小銭持っていますか?」) "Do you have a quarter?" (「25セント持っていますか?」) 街頭で見知らぬ人からこう声をかけられたら、お金をたかられているのである。"I beg your pardon?" (「え、何ですって?」) などと立ち止まる必要はない。見知らぬ町で見知らぬ通行人に声をかけられた場合、良い用事など期待しない方がいい。多少失礼になっても、危険を犯すよりは無視を選ぶべきである。さっさと通り過ぎよう。

ただより高いものはない 不審な誘い

は "No, I don't want to." で断ろう

次のような場合あなたははどうするだろうか?

1. 空港でタクシーを探していたら見知らぬドライバーが "Do you want a ride?" (「乗せ

てあげます」と誘ってくれた。

2. 遊覧船で見知らぬ人と会話がはずみ、自分が観光客だと言ったら "You don't have to stay in a hotel. Why don't you stay at my house?" (「ホテルなんか泊まる必要ないよ、私の家に泊めてあげよう」) と言ってくれた。
3. 観光地を歩いていたら "I like Japanese people very much. I can show you around." (「私は日本人が大好きです、あたりを案内してあげます」) と申し出てくれた。
4. 公園のベンチで休んでいたら見知らぬ人が "Why don't you try some of my home-made cake?" とケーキを差し出した。

残念ながら、無料で何かをしてあげようと言ったり、カタコトの日本語で日本大好きと言い寄るのが、犯罪の手口である場合が多い。上記1、2は強盗やレイプの手口、3は後になってガイド料を請求してきたり売春の手口、4は睡眠薬強盗の可能性が有る。レイプというと女性だけが被害に会うと思ったら間違いで、男性も用心が必要。しかもレイプはエイズ感染の危険も伴う。このような誘いはきっぱりと断るべきだ。「ただより高いものはない」、これが自己防衛の第1のルールである。

## 断るのに理由は要らない

上記のように誘って来る場合、相手はペラペラとまくし立てて、断ろうとするあなたに "Why can't you?" "Why don't you trust me?" と食い下がるかもしれない。このような相手に、あなたが不自由な英語で理由をわからせようとする、かえって相手のペースにはまり、断りにくくなってしまう。この場合強い口調で "No, I don't want it!" "Go away!" と断ること。断るのに理由は要らない、これが自己防衛の第2のルールである。

相手の部屋へ誘われたら "I'd prefer getting together somewhere else."

## で安全を図ろう

語学研修など滞在型の海外旅行では、同じ人と顔を合わせるチャンスが多いため、現地の人と知り合いになることがよくある。まさにそうした出会いが滞在型旅行の利点である。筆者が教えたり引率した学生の中にも、そうした出会いから友情が生まれ、今では親友同士の関係になっている人も多くあり、結婚にゴールインした人もいる。

ただし、人と人が良い関係を育てるには、それにふさわしいステップがあるはずである。例えば語学研修でたまたま同じクラスになった異性が、あなたを映画やレストランの食事に誘うのは常識の範囲内だが、いきなり自分の部屋(ホテル、アパート、住宅)に誘うのは行き過ぎである。もしあなたがその誘いに応じれば、性的関係を持つことを承諾したと受け取られてもしかたがない。

このような非常識な相手とは距離を置いた方が賢明であるが、それでも相手と良い関係を育てたいのなら、幾つもの段階を踏んで相手の人格をよく観察し、相手に手間をかけさせることである。あなたを本当に人間として大切に思っている相手なら、こうした手間をいとわないだろう。逆にあなたを単に餌食にしようとしている連中は、面倒がって離れて行くだろう。先述の、スパゲッティ・レイプ事件などはこうやっていれば起こるはずがない。

ホテルの部屋に誘ってきたら "Why don't we meet at X's Restaurant?" (「Xのレストランで会いましょう」)、夜のデートに誘われたら "I'd prefer getting together during the day." (「昼間に会う方がいいです」) と主張しよう。時間をかけて相手の人格を観察する、これが自己防衛の第3のルールである。

## しつこくつきまとわれて迷惑な場合に

は "Leave me alone." とはっきり言う

海外語学研修中、1人の現地男子学生(Chris としておこう)が2人の日本人女子学生を気に入ったらしく、毎日2人のあとを付いてまわり始めた。

最初は友好的に対応していた2人も、毎日休み時間に cafeteria でべったりとつきまとわれて次第に重荷になっていった。ついに2週間ほど経った頃、たまりかねた2人は筆者に相談に来た。筆者は次のようなセリフを書き、2人に渡した：

"Look! I don't want to be rude, but leave us alone."

翌日 Chris がいつものように近づいてきた時、2人は思いきってそのとおり彼に話した。それ以後 Chris が2人をわずらわせることはなくなった。

それでもつきまとう相手は "Go away!"

で撃退する

上述の Chris はすんなりと引き下がったが、"Leave me alone." と言っても更に付きまってくる場合には、断固として "Go away!" と言おう。「断固として」とは、相手を見据えて腹に力を入れて吼えることだ。あいまいな微笑や蚊の鳴くような声では効果はない。断固とする、これが自己防衛の第4のルールである。

レジの支払いで「変だ!」と思ったら

直ちにストップをかけよう。

日本人旅行者は、レジで cashier を無条件に信用しがちなため、注意が必要である。これは筆者の友人が日本人旅行団を引率中に起こった出来事である。あるみやげ物店で買い物中に、団員の何人かが「先生、レジでお金を余分に払わされたみたいです」と訴えて来た。そこで友人が cashier に、"I am afraid some of my students might have accidentally been overcharged here." と交渉したところ、"Show me your receipts." (「レシートを見せよ」) と言われた。ところが団員たちはレシートを受け取っていないと言う。Cashier は「レシートは渡した」と言い張って取り合わない。友人は意を決して "I want to see the manager." と打って出た。Manager はやって来て双方の言い分を聞くなり、問題の cashier が担当する cash

register をかかえて持ち上げてみた。なんとその下には、cashier が渡さずに隠した receipts がザクザクと詰め込まれていた。その悪徳 cashier はレジに金額を打ち込む際に、買ってもしない商品を追加して打ち込み、お金を余分にとって着服していたのである。

自衛の策としては、買い物をしてレシートをくれなかったら "May I have a receipt, please?" と請求することである。Receipt があれば、overcharge は見破ることができるし、買った商品に欠陥があった場合にも replacement を要求することができる。レシートを必ずチェックする、これが自己防衛の第5のルールである。

その他、これは意図的ではないのだろうが、筆者が引率した人の中にも、つり銭を間違えられたり、両替所で現金を少なく渡された人もある。またホテルのチェックアウトの際、宿泊料に加えて掛けてもいない電話料金が請求されていたケースもある。請求書が不審な場合には "Excuse me, but I think there may be a mistake on the bill."、釣り銭が間違っている場合には "How much was it?" とストップをかけよう。

救急車を呼ぶには "I need an

ambulance."

海外旅行で訪問国に着いたら、まず緊急電話のかけ方を確認しておこう。例えばアメリカ・カナダでは救急・警察・消防の緊急電話番号は911、イギリスでは999、オーストラリアでは000である。急病人が出て救急車を呼ぶような場合には、次のような会話が予想される。

Operator: Emergency service. What do you need?

Tourist: I need an ambulance, please.

Operator: What is your problem?

Tourist: My wife has collapsed. She's unconscious. Send an ambulance as soon as possible.

Operator: Where are you now?

Tourist: We are on the corner of Eaton Street and Lexington Avenue in New Westminster. We are in front of Lloyds Bank.

Operator: Okay. What is your name?

Tourist: Satoshi Tanaka. We need someone who speaks Japanese.

Operator: Okay, we'll try. We'll be there in five minutes.

Tourist: Thank you very much.

ホテルやモテル滞在中の緊急事態ならば、フロントに連絡して対応してもらえ(そんな場合、あとでフロント係員にチップを渡すことを忘れないでおきたい)。病状や犯罪被害の説明などでは、かなりの英語力を要するので、上の例のように日本語の話せる人を要請するのも一手である。複雑な事態では "We need someone who speaks Japanese." と言おう、これが自己防衛の第6のルールである。

なお、イギリスの999では、英語の通じない人から救援要請の電話があった場合、その電話の所在地を逆探知して緊急隊がかけつけ、オンラインの通訳が援助するシステムになっているというから、たとえ日本語でも緊急連絡は可能である。

## 道に迷ってパニックになったら

バスを乗り間違えてあわてて降り、無我夢中で歩いてゆくうちに、いったい自分がどこにいるのかもわからなくなってしまった。やっと通りかかった通行人に道を聞いても、"Sorry, I'm a stranger here." という返事。今日はツアーの移動日、集合時間が近づいてくる。もう間に合わない、ああ、どうしよう。

そんな時のひとつの手は、タクシーに乗ることである。ただ、西欧では日本のようにタクシーが流して走っている国は少なく、電話で呼び出す方式が多い。公衆電話ボックスに入り、電話帳でtaxiを引き(電話ボックス内に案内が貼られていることも多い)ダイヤルして次のような会話をすることになる。

Operator: Greyhound taxi, can I help you?

Tourist: Yes, I'd like to get a taxi, please.

Operator: Give me your address, please.

Tourist: I'm calling from a public pay phone along Hamilton Street.

Operator: Where on Hamilton Street?

Tourist: Just across from St. Andrew's Church.  
The number of this phone booth is 105.

Operator: And your name, please?

Tourist: Satoshi Tanaka. About how long will it take?

Operator: About ten minutes, sir.

Tourist: Okay. Thank you.

上記の下線部のように、自分のいる通り名や目印、電話ボックス番号などをメモしてから電話するとよい。そこまでの英語力が無い場合には、付近の商店などに入って "Excuse me. I am a tourist from Japan. I am afraid I have got lost. Could you help me call a taxi, please?" と依頼するとよい。

タクシーが来たら、乗りこむ前に念のため目的地までいくらかかりそうかを尋ねよう。"I'd like to go to Victoria Station. Do you know where it is? How much does it cost to go there?" こうしておけば、法外な料金を請求される心配は無いだろう。事前に料金を尋ねる、これが自己防衛の第7のルールである。

## ホームステイの約束がちがう "I have a complaint."

英語力を高めたい人にとって、ホームステイは家庭的なつきあいを通して English shower を浴びる絶好の機会である。一度ホームステイした家族とその後連絡を取り合い、一生のつきあいを育てている人も多い。ただし、まれにはあるが劣悪なホームステイで不愉快な目に会う事例も見聞きする。

ホームステイを申し込む際には、次の基本的条件は主催者に確認しておく必要がある：

(1) 個室提供かどうか、(2) 食事は何食付か、

(3)single home stay (1件にステイするゲストは1名のみ)かどうか、(4)ホストファミリーが英語の native speaker かどうか、(5)語学研修付きの場合の通学はホストファミリーによる送迎か公共交通機関か

しかしこうした条件を決めているにももかわらず、英語圏に非常に多くのホームステイ団が殺到するために、現地 coordinator (ホームステイの世話役) がホストファミリーを確保できず、条件に合わない家庭に配属する業者も無いとはいえない。

条件を満たさない家庭に配属されても、日本人は満足した振りをして苦情を言わないことが多い。しかし、例えば配当されたホストファミリーが英語のネイティブ・スピーカーでなく、家族同士が英語以外の言語で会話しているなどといった場合、著しくホームステイの目的から外れている。このような場合には現地 coordinator (通常この人がホストファミリーを決定している) に、"I have a complaint. My host family are not native English speakers. According to our agreement they should be native English speakers." と申し入れるべきである。むしろこれは「自分の要求を堂々と口に出す」という、本物の英語力を磨くチャンスでもある。Coordinator にどの程度の改善ができるかは状況次第だが、もしも全く耳を貸さない場合には、ツアーを主催した日本の旅行業者に国際電話を掛けて苦情を言うとよい。大切なことは、自分の要求を堂々と主張する英語力を鍛えること、それが自己防衛の第8のルールである。

## 苦情を言う時こそ、相手を持ち上げてから

先ほどはホームステイの条件について、多少きついことを書いた。ここでお断りしておくが、「自分の要求を堂々と主張する」ということは、「無礼な英語を使え」という意味では決してない。「英語では思ったことをストレートに口に出してよい」というのはとんでもない誤解である。英語にも丁寧表現が発達しており、特に「相手の行動を変えさ

せようとする」場合には相手の気持ちを配慮した表現が用いられる。

例えばホストマザーがあなたに弁当 (sacked lunch) を作ってくれるのだが、その中にあなたの大嫌いな parsley が入っていると仮定しよう。このような場合、ホストマザーに何と言ったらよいだろうか？

例えば "I hate parsley. Please don't put parsley in my lunch." と言うとしたら、ホストマザーの気持ちを傷つけてしまう。これはこうした場面ではかなり arrogant (傲慢) な英語表現なのだ。ではどうしたらいいのか？取るべき方略としては、まず、何気ない口調で自分がこのホストファミリーを大変に気に入っていることを述べ、

それから、ふと思いついたように自分の事情を声を小さくして伝えることだ。例えば次のような英語ではどうだろうか？

"I am having such a good time here. I am really glad I came." "There is one thing I want to ask you. I don't like parsley very much."

これならばホストマザーはにっこりとしてあなたの希望を聞いてくれるだろう。

同様のケースとして、オーストラリアにホームステイした時、1人の女子学生が「私のホストファザーはいい人ですが、毎晩帰宅すると私を hug (両腕で抱くこと) するのだけは、嫌でたまりません」と相談に来た。私は上記の英語表現の部分を次のように変えて彼女に教えた：

"It might be a cultural difference, but I am not accustomed to being hugged. It makes me a little uncomfortable. I know you are trying to be nice, but..."

彼女がそれを言ったところ、ホストファザーは hug するのをやめ、しかも以前と変わらぬ好意で接してくれたという。

苦情を言う時ほど、相手を持ち上げてから、これが自己防衛の第9のルールである。ただしこれは相手の行動に注文をつける際の配慮であって、単なる不具合の連絡は率直に言ってもかまわない。

(例："I am not sure, but maybe the air conditioner in my room is not working.")

## 苦情の言い方で迷ったら、現地に詳し

### い人に相談しよう。

先ほどは、相手の気持ちに配慮した苦情の言い方を紹介したが、英語でも直接相手に苦情を言わない方がよい場合がある。例えばホームステイで、スーツケースの中に入れておいたおみやげの香水が無くなっていたとする(鍵はかけていなかった)。しかもその後、ホストシスターがまさに同じ香水の香りをぶんぶんさせながらバスルームから出て来たとする。さて、あなたならどうするか？

これはデリケートな問題で、相手を泥棒よばわりすれば名誉をかけた問題になりかねない。自分で対処する自信がない人は、coordinator に相談するのが安全策である。また、紛失した物が高価なものである場合は必ず coordinator に相談すべきである：

"I have a problem. I bought a bottle of perfume and put it in my suitcase. Last night I found it was gone, and my host sister seems to be wearing it. What should I do?"

自分で何とかするという場合、せいぜいできることは、ホストファミリーに「自分の香水が見当たらない」という事実を述べるくらいだ：

"I thought my perfume was in my suitcase, but I can't find it. I don't remember moving it. Has anyone seen it?"

英語もこのような実践レベルになると、市販の教材ではカバーしきれなくなってくる。常に「こんな場合どうしたらよいか」という問題意識でアドバイスを求め、自分の英語レパートリーを増やしてゆくこと、これが自己防衛の第10のルールである。